



菅波 茂

7月9日。スリランカ中部の山あいには造られた小さな公設診療所の開所式に参加する米善を得た。中心都市コロロンボから車で6時間もかかる辺地である。セイロン紅茶の産地として有名で、山々は見渡す限り茶の緑で覆われ、杜鰲である。60%が政府経営、40%が企業経営とこのことである。

150万人のインド・タミルと呼ばれている人たちが生産に従事している。彼らは19世紀に英国によってインドから労働力として連れてこられた。貧しい地域である。デシルバ保健・厚生・ウワ地方開発大臣の選挙区でもある。デシルバ大臣とは6月30日に東京で開催された「九州・沖縄サミット」世界基金構想5周年記念特別シンポジウム」の会

場で知り合った。

デシルバ大臣を迎えた開所式は、精いっぱい着飾った子どもたちの踊りによって始まった。僧侶による読経。小学校の校長先生による祝辞。デシルバ大臣によるスピーチ。なぜか日本から来た祝い客として私も紹介された。

デシルバ大臣の支援者にインド・タミル150万人を率いる労働組合長がいた。私に口角泡を飛ばして抗議した。午後9時から翌日午前2時まで。「断固、日本および日本人に抗議する」と。理由は複雑だった。19年間にわたる政府とタミル人武装勢力「タミル・イーラム解放の虎」(LTTE)との内戦がノルウェーの仲介により停戦となった。そして日本政府が復興支援を開始した。スリランカ政府はその一環として水の豊富なこの地域に発電所を造った。彼らは発電所が造られた後に大量のシ

ンハラ人が移住してくることを恐れて政府と交渉した。9カ所の発電所を1カ所だけにする約束になった。しかし、政府は一気に9カ所の発電所を完成させた。彼らはだまされたと激怒した。日本大使館のみならず来日して外務省、労組などに相談した。どこでも真剣に取り合ってもらえなかった。彼らは複数の国会議員を当選させる集票能力を持っている。労働者によるストライキを行えば、一日数億円で上の経済的損失を政府に与えることもできる。その巨大な社会的影響力をどう駆使するのか。予断は許されな

和平へのプロセス

いと思つた。

02年1月。明石康政府代表(スリランカの平和構築および復旧・復興担当)から、政府、LTTEそしてムスリムの3グループに日本政府の公正な姿勢をアピールする方法として、日の丸を掲げた巡回

診療所の要請を受けた。2年間にわたるAMDAの真摯な活動は信頼を得た。04年12月に発生したインド洋大津波被災者救援活動では、北部と東部のLTTE支配地及びイスラムの地域にあるすべての小学校での巡回診療と衛生教育を依頼されたほどであった。津波被災者に対する海外からの救援活動が復興と平和を推進する大きな要因になりつつある。一方、支援が新たな政治的対立を生み出すとしていいる。予測可能なことも不可能なこともある。政治とは対立軸である。政治の要諦とは「民を食へさせ、民の血を流さず」である。大きな対立軸から小さな対立軸への移行は和平への具体的なプロセスである。インド・タミルの貧困問題解決は日本の新たな海外支援の目標になる可能性がある。

(AMDA代表)

題字は筆者